IS ＜インフィニット・ストラトス＞ ～禁書目録の転生者～

悠梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　＜インフィニット・ストラトス＞　～禁書目録の転生者～

【Ｎコード】

Ｎ４７０４Ｙ

【作者名】

悠梨

【あらすじ】

女の子をかばってトラックにひかれて死んじゃった私・朱美　夜宵。

目を開けてみれば真っ白な空間…じゃなくて私の部屋！？　しかも助けた女の子は実は神様！？　神様の恩返しによってＩＳ　＜インフィニット・ストラトス＞の世界に転生した私。でも何故だか知らないけど渡されたのはチートのかわりに「とある魔術の禁書目録」のインデックスの容姿に完全記憶能力、『歩く教会』、そして『自動書記』！

プロローグ（前書き）

もうひとつの作品の息抜きとして書くつもりです。
更新停止したらごめんなさい！

プロローグ

キキィーーッ！

甲高いブレーキの音が耳をつく。
悲鳴を上げる野次馬の声もどこか水を通して聞いているようだ。
あ、目が霞んできた。
ーーーーああ、せめて『とある魔術の禁書目録』の新巻、読みたかったな。
頭の隅でどうでもいいことをぼんやりと考える。
そして何故こうなったのかをぼんやりと考えた。

ことの始まりは学校から帰ったことからだ。
キーンコーン、カーンコーン、とチャイムの音が響く。
その音に混じってざあざあと雨が降り注いでいる。
やっと学校が終わった。
私ーー明美　夜宵はカバンを持ちながら黒板の日付を見る。
「あ」
今日はあの本が出る日だ。帰りに本を買って帰ろう。
そう思いつつ学校から出ると、やはり変わらず雨が降っている。
折り畳み傘を開いて肩で支えると、濡れないようにカバンを抱えて本屋へと向かう道のりをたどる。
人ごみの合間をぬって出来るだけ急いで本屋へと向かう。
（あの本屋は意外に人気だから……）
新巻はあっと言う間に売れてしまう。
足を進めていると信号に引っ掛かってしまった。
バシャンッと水溜まりの水を飛び散らしながら目の前を車が通りす

ぎる。
びしょびしょになったスカートを見てため息をついてから顔を上げるーーーー。

道路に棒立ちになった、幼い一年生くらいの少女。
その前に迫る、トラック。
肩にかかるくらいの特徴的な茶色の髪が、ふわりと風圧で揺れた。

ーーーーとる行動など、一つしかなかった。
彼女のいるところまで、全力で走る。
悔いたことのない自分の足の遅さが、今はただただ恨めしい。
細い体をあらん限りの力で突き飛ばすと、
目の前にはトラックがあった。

眩しい。
目を開けて最初にそう思った。
しかし、目が慣れてみるとそこは私の部屋だった。
だが、違和感しか感じない。
と言うのも、私は死んだはずだ。
トラックに踏み潰される感触も（もう二度と体験したくない）覚えている。
それにーーーー、
目の前に私が助けた茶髪の女の子がいた。
「ごめんなさい！」
「……、は？」
思わず間抜けな声を出してしまった。
「ごめんなさい！　本当にごめんなさい！」
「あのー、ちょっと説明希望」
ぺこぺこと頭を下げて、今にも土下座しそうな女の子に状況を説明

してもらう。
「えっとですね、私は神様なんです！」
「……、」
今なんて言った？
私は神様なんです神様なんです神様なんです神……、
……はっ！
「もしかして、あれ？」
「あれってなんですか？」
「あれなの？　二次創作とかでよくある『間違えてアナタ殺しちゃったから転生させてアゲルヨー』って言うやつ？」
「は、はい、そうです！」
はぁ、そうなんだ。
すぅ～…っと息を吸って、
「ふざけんなーーーーーっ！」
「ひ、ひいっ！？」
そんな人の生死をミスで変えるんじゃないよ！　どれ、一発ぶん殴っ…
「ご、ごめんなさい！」
女の子ー神様が涙目で見上げてきた。
無理！　こんな可愛い神様を殴れるハズがない！
あまりの可愛さにぷるぷると震えていると、
「お、怒ってます…よね？」
「怒ってない怒ってない」
手を振って怒っていないことをアピールする。
「よかった！」
神様はぱっと笑顔を見せてくれた。
ああ、お母様、夜宵は同性愛に目覚めそうです！
「それで、本題なんですけど、あなたの言ったとおりに転生することになるます」
「ふむふむ」

「転生先は『ＩＳ　＜インフィニット・ストラトス＞』になります」
「待ったぁ！」
ここでストップをかける。なぜかと言うと、
「『ＩＳ　＜インフィニット・ストラトス＞』って、何！？」
「えぇっ！？　し、知らないんですかぁ！？」
神様がびっくりして言う。びっくりする仕草まで可愛いなんて……。
「……ま、まぁ、知らない物語の中に転生するのも楽しいと思いますよ？」
えぇ～……。
「嫌ですか？」
ヤメテ！　そんな悲しそうな顔をしてこっちを見ないで！
「分かった分かった、そこでいいよ」
泣きそうになった神様に慌てて言う。
「それで、特典なんですが……」
「やっぱり、『とある魔術の禁書目録』の一方通行（ベクトル操作）が……」
「ごめんなさい。無理なんです」
「な、ななななな何で！？」
「…私は下級の神なので難しいものはダメなんです……」
ヤメテ！　そんな悲しそうな顔で（以下略）。
「じ、じゃあ柿根帝督（未元物質）は」
「無理です」
「じじじじゃあ、御坂美琴（超電磁砲）は」
「無理です」
「…インデックス（完全記憶能力）は」
「いいですよ」
「いいの！？」
食いついた私に神様は、
「オマケとして１０万３０００冊の魔導書と、『歩く教会』と『自ヨ（ハネのペン）

動書記』をつけてあげます」
「やったー！　って『自動書記（ヨハネのペン）』？！」
喜びつつもギョッとする私。
「『自動書記（ヨハネのペン）』は自分の意思で作動できますよー」
「よかったー」
ほっと一息つく私。
「それでは、行ってきてくださいー」
「あ、ちょ、待った！」
「？　何ですか？」
「できればでいいんだけど、その…『ＩＳ　＜インフィニット・ストラトス＞』の原作開始まで時間を飛ばしてくれない？」
「いいですよ」
やったー！　羞恥プレイを回避できた！
「独り暮らしと言うことにしておきますね」
「は～い。あ、そうだ！」
閃いた私を怪訝そうに見る神様。
「名前を教えて！　それから携帯で話せるようにしてくれない？」
「…？　あっ！」
一瞬きょとんとした神様だったが、私の言葉の内容を理解すると同時にぱっと笑みを浮かべた。
「了解です！　私の名前はリィンです！」
「リィン…いい名前だね！」
私がそう誉めると、桃色の頬を赤く染めて、
「それでは行って来てください！」
リィンの元気な声と同時にパカッと足元に穴が空く。
「貴女の二度目の生に、幸在らんことをーーーーーーー」
その言葉が聞こえて、私の意識は闇に堕ちた。

「まさか、あんなことを言ってくれるなんて……」
私ーーリィンは嬉しげに、
「あの人、天然なのかしら……？」
そっと呟いた。

プロローグ（後書き）

プ、プロローグ長ーーー！？

な、なんかやたらと長くなったー！？

主人公紹介・用語紹介（前書き）

まさかの連続投稿です！
ちなみにここは話が進むたびに編集されます。ネタバレが嫌な人はブラウザバックした方がいいと思います。

主人公紹介・用語紹介

名前
インデックス（前世は明美夜宵）

容姿
『とある魔術の禁書目録』のインデックス。
銀髪に翠の目、白い肌に小柄で華奢な体格とかなり可愛い。
服は常に『歩く教会（修道服）』。

所属
イギリス聖教　第零聖堂区「必要悪の教会（ネセサリウス）」。

職業
シスター及び魔術師・魔道書図書館。
ＩＳ学園に入ってからはシスター、及び学生。

魔法名
現在不明。

性格
原作のインデックスと非常によく似た性格。
天真爛漫かつ若干わがままな性格で、子供っぽい言動が目立つ。
普段はシスターらしからぬ振る舞い（もともとシスターではなかったため）が多いが、絶望的な状況でも「祈りは届く」として決して諦めないなど、篤い信仰心や深い慈愛の精神も見せる。インデックス補正なのか口調の最後に「～～かも」や「～～なんだよ」がつく。

しかし、少々黒い所があり、キレると口調が「〜〜かも」ではなくなる。
とにかく平穏はなくなってもいいから賑やかさを好む。

食欲
外見に似合わず非常に食欲旺盛かつ大食いで、腹を空かせて食事をねだることが多い。反面、空腹がいつまでも満たされないでいると機嫌が悪くなる。シスターなので本来嗜好品や食欲への執着は禁じられているが、本人は修行中だから仕方ないとして後ろめたさを感じつつも誘惑を断てずにいる。好き嫌いは特に無くとにかくよく食べ、数人前の量を一気に食べ尽くし周囲の人間を呆れさせる事もよくある。

経歴
女の子に扮してトラックにひかれそうになった神様（リィン）を助けて死亡。
その後神様（リィン）に転生させてもらった。
神様とは携帯で会話できる。
チートのかわりに『とある魔術の禁書目録』のインデックスの容姿に能力をもらった。
※能力については後述。

出身地
ロンドン。

国籍
前世の国籍は日本だったが、転生したためイギリスになった。

知能
非常に優秀な頭脳を発揮し、それに関連して文学や語学方面の知識

も豊富。非常に本好きで漫画や絵本でも目の色を輝かせて読み耽り、数十ヶ国もの言葉を喋れるほか未開の文化圏の言語すら習得できる程。
原作のインデックスは科学に関してまったくダメだったが、今作品のインデックス（夜宵）は科学に関しても詳しい。

能力
能力１
完全記憶能力
完全記憶能力は一瞬見たものでも二度と忘れない。つまりどんなに分厚い資料だろうが一度読めば完璧に一言一句違わず暗唱できる。

能力２
『１０万３０００冊の魔導書』
１０万３０００冊の魔道書を記憶している「魔道書図書館」を担っている。それらは常人が一目見たら発狂するほど危険な「原典」である一方で、世界の常識（ルール）を変え、手に入れた者を「魔神」にするほどの価値があり、それ故にその身を魔術師に狙われることも多い。彼女が魔道書の汚染の影響を受けない理由は、一歩間違えば人間としての基本性能すら失うレベルの精神調整を何十回も繰り返し、大量の防御機構（宗教防壁）を格納しているためらしい。
それによる知識から魔術を逆算し、対抗策を作り出す。今作品ではインデックス（夜宵）は科学をかじっているため科学により立証された弱点を徹底的に攻める魔術を作り出すために使われる。

能力３
『自動書記（ヨハネのペン）』
能力２の『１０万３０００冊の魔導書』により作り出された魔術を使うための能力。
瞳には赤い魔法陣が浮かび上がり冷徹かつ無機質な擬似人格が表出

し、無表情と機械的な言動で必要な措置を実行する。喋り方も淡々とした口調に変化し、特に非常時や魔術行使の際には「第〇〇章第××節。　―　」といった書物の記述の引用のような語句を頭に付けた話し方となるのが特徴。
発動中は本人の意思はあるものの、“中?から見ているだけとなる。人形のような喋り方・表情になるため、初見の人はだいたい怯む。
『とある魔術の禁書目録』とは異なり自分の意思で起動することができる。
「神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・エリ・レマ・サバクタニ）」、北欧神話の伝承を再現した「豊穣神の剣」、様々な攻撃を可能とする血のように「赤い翼」を背から生やすなど、多種多様で強力な魔術を発動する。

通常装備
『歩く教会』
服の形をしており、フードと修道服がわかれている。
この『歩く教会』は教会としての最低限の設備が整えられた名前のとおりまさに“歩く?教会であり、結界である。「服の形をした教会」と称され、どのような攻撃も無効化する法王級の結界を持つ霊装。インデックスの身を守ると同時にその存在を探知させないという効果もある。
この防御は包丁で刺されたくらいではびくともせず、『白式』の『雪片弐型』をも防ぐことができる。
ただ服の形をしているため、脱いでしまうと意味がない。
ちなみにドラ〇もんの四次元ポケットのようにものをたくさん入れることができる。

通常武装
『七天七刀』

神裂火織のものを借りている。黒鞘に納められた2メートルほどの日本刀。
おまけとして銅糸（ワイヤー）がついており、その銅糸は絶対にちぎれない。
銅糸は細く、水にぬれたりしない限り全く見えない。

ＩＳ
『夜宵』
インデックスのＩＳ。第3世代型ＩＳ……なのだが、インデックスたち科学に詳しい魔術師によって改造（改良）されたため、見た目以外はスペックが信じられないほどに高いぶっ飛んだことになっている。

「七天七刀」　（コピー）
神裂火織の「七天七刀」をそっくりそのままコピーしたもの。しかし、オリジナル（本物）とは異なり、黒ではなく銀。
銅糸もコピーされている。

『七閃』
銅糸によって繰り出される七つの連激。
一瞬にして七回地面または相手を切り裂くことができる。

『唯閃』
『七閃』と違って全く手加減ができず、本当に強い相手にしか使わない。
抜刀術の構えから一閃して相手を切り裂く。

用語紹介

魔術

呪文や儀式によって超常現象を発生させる技術・理論の総称であり、いわゆる魔法・魔術。

一口に魔術といってもその効果は様々で、攻撃的な魔術から防御や治療・移動や通信などの補助的な魔術まで多岐に渡る。また、多種多様な種別や系統が存在し、近代西洋魔術、ルーン魔術、錬金術、陰陽道、カバラなどの魔術理論から、所属する宗教や神話の理論に沿った物まで、術者によって異なる。目的さえ定めれば自分の望むような異能をセッティングする事も出来るため、非常に自由度・万能性が高く便利な力である。

天界などのこの世とは違う別位相空間の異世界における法則をこの世に適用する事によって、通常の物理法則を超越した現象が発生するという原理であるという。手順としては、まず初めに魔力を精製し、その魔力を任意の形で操作するコマンドとして記号を示したり儀式を行う事で術式が組み立てられ、魔術が発動する。なお、魔力運用のコマンドは既存の宗教的法則や伝承を応用して組み立てるのが最も効率的とされる。魔術は厳格に体系づけられた学問でもあるので適当に行っても使えず、法則を無視したデタラメな現象も起こせないが、必要な知識を学んで正しい手順を踏めば素人でも使える。ただし、宗教防壁を備えていない（宗教に疎い）者が頻繁に使用すると脳がショートする恐れがある。便利で有用だがその反面危険性もあり、軍事機密や兵器技術のような側面もあるので秘匿され、一般には普及していない。

魔力
術者の生命力を変換・精製して生み出す力であり、魔術行使の際のエネルギー源。　「生命力という原油を、流派や宗派という製油所を使って精製したガソリンのようなもの」と例えられる。精製方法を変えればガソリンではなく重油や軽油が出来るように、同じ人間の生命力を使っても練り方や宗派を変えれば力の質やパターンが大きく変わる。　原則的に全ての魔術は魔力を消費して発動される。地脈・龍脈や天使の力といった外部のエネルギーを用いる魔術についても呼び込む際に魔力を使うため、魔術には術者の魔力が必要不可欠である。

魔術師
魔術を行使する人間の総称。いわゆる魔法使い・魔術師。　使用する術式や所属する宗派・組織などによって千差万別だが、１９世紀末に確立した「近代魔術師（アドバンスウィザード）」の傾向として個人主義が強く、組織の利害や金銭的な契約よりも私情や信念を重視する者が多い。また、特に魔道書を執筆しその内容を広めたり弟子に魔術を教えたりする者を「魔導師」と呼ぶ。

魔法名　（ラテン単語　＋　数字３桁）
近代魔術師の慣習。自分の魂に刻み付けた大切な願いや信念の象徴を通り名として名乗っており、これを名乗るのは自らの覚悟の程を宣言するに等しい。戦闘に重点を置く魔術師にとっては「殺し名」ともされ、相手が魔法名を名乗る時は名乗り返さなければ失礼にあたる。後に続く数字は同じ名前が重複した時のためのもの。

魔道書
魔術の使用方法（異世界の法則）が記された書物。毒の純度を薄め効力の弱まった「偽書」や「写本」と、毒が強く強大な力を秘めた「原典（げんてん、オリジン）」がある。なお、作中に登場する魔道書は名称としては実在する。　知識を広めることを目的として書かれているが、魔道書に記された異世界の知識はこの世にとって猛毒であり、常人が目を通すと脳を汚染されて発狂もしくは廃人になる。並みの魔術師でも原典を読み解くのは難しく、魔道書の毒に耐えられる技量や特性を持つ人間は稀である。　原典クラスともなると文字や文章など本そのものが高度な自動魔法陣と化し、地脈など自然に存在する力を収集・増幅させ動力源として半永久的に自律稼動する。自己防衛機能によって破壊や干渉を受け付けず、たとえ破壊できたとしても力ある原典ならすぐ再生してしまう。逆に中途半端な魔道書は暴走したり自壊してしまう。　リスクは伴うものの強大な魔術を得る事ができ、また単に読んで使うだけではなく所持するだけでも自動機能を利用した魔術行使が可能となる。自身の知識を広める者に協力する性質を持ち、それを妨害する者はたとえ所有者や使い手であっても攻撃する。

イギリス聖教
イギリス・ロンドンに拠点を置く十字教の一派。イギリスの国教。英国三派閥の清教派と同義。建前上のトップはイギリス女王のエリザードだが、実質的には最大主教（アークビショップ）のローラ＝スチュアート。現実世界の英国国教会に相当する。
　本拠はロンドンの聖ジョージ大聖堂（建前はカンタベリー寺院）。魔女狩りや異端審問といった対魔術師の分野に特化しており、その実働部隊として「必要悪の教会（ネセサリウス）」を有する。

必要悪の教会（ネセサリウス）
イギリス清教第零聖堂区（だいゼロせいどうく）。魔術関連の事件捜査や、魔術師・魔術結社の殲滅・処分を任務とする組織であり、対魔術専門国際治安維持機関である。設立当初は一部署に過ぎなかったが、現在ではイギリス清教、ひいては英国三大勢力としての清教派の実質的な権限を握っている。　対魔術を司る部署だが、魔術に対抗するために構成員達は魔術に長けており、その名の通り魔術という穢れを一手に担い毒を以って毒を制する必要悪として存在している。また、戦闘要員は完全実力制であり、十字教とは関係しない魔術師も在籍する。なお、構成員は公務員と同等の安定収入が得られる（その給料は国民の血税から賄われている）。

主人公紹介・用語紹介（後書き）

う～ん…、今更ながら主人公最強？

ｐａｒｔ１（前書き）

あー……。

インデックスさんのＩＳどうしよう…。

part1

「…知らな…知ってる天井だ」
私――夜宵ことインデックスは最初に呟いた。
軽く腕を上げてみれば、どこかで見たような修道服。
『歩く教会』だ。
ちなみに冒頭で言葉を言い換えたのはなぜかと言うと、生まれてからこれまではカットされているだけで実際には経験している。
つまり、皮をむいた後のリンゴを見て、皮はどんなものだったかをしりたければむいた皮をみればいいのだ。
という事で思い出してみると。
凄い凄い。いつ何を食べたかまできっちりと覚えているのだ。って、この人……！
新幹線もビックリな速度でベッドから飛び降り（ベッドが凄く大きかった）向こうのテーブルに置いてある携帯を掴む。
「もしもし！？　リィンさん！？」
『は～い、何でしょうか？』
「なんだって『必要悪の教会（ネセサリウス）』があるの！？」
――『必要悪の教会（ネセサリウス）』。
『とある魔術の禁書目録』に出てくる、インデックスが所属している教会だ。
『え～っと、ですね、と言うのも今回転生した『ＩＳ　〈インフィニット・ストラトス〉』なんですが、』
『これが、学園バトルハーレムものなんです』
「……は？」
本音を言うと、私はハーレムものが大っっ

のである。
しかし、その前にも問題が……。
「ば、バトルもの？」
そうなのえある。バトルである。
『そうなんですよ！　バトルものなんですよ！　この話は困ったことに、ＩＳと言う女性にしか使えない武器の使い方を学ぶＩＳ学園と言うところが舞台の、バトルものなんです』
え？　それならハーレム要素はな……あー。
『そうなんです、あなたの予想通り、女性にしか動かせないＩＳをただ一人、男で動かせるやつがいたんですよ』
「はぁ……」
憂鬱だ。しかし、
「そういえば私もＩＳ学園に……」
『入りますよ！』
「ほう……。で、なんでそれと『必要悪の教会（ネセサリウス）』に関係が…？」
『神裂火織さん、いますよね？』
「え、ももももしかして……」
『神裂さんに剣を教えてもらうためです！』
「ななな、なるほど…」
『剣の使い方、頭に入ってますよね？』
「え、うん……」
『でもちゃんと稽古はしてくださいね！』
ちゃんと念を押してから、
『神裂火織さんを作った時に、どうせなら『必要悪の教会（ネセサリウス）まるごと作っちゃえ♪　……という事で作っちゃいました』
そんなノリで作っちゃって大丈夫なんだろうか…？
とと、それと…、と慌てて言うリィン。
『あなたは神裂さんと大の親友ですよ！』
「え、そうなの？」
『ええ！　…ちなみに私と話す時以外はインデックスの口調になり

ますからね！　…キレた時は別ですけど。この世界の世界観はそこの携帯の横の紙に書いておきました！』
「え、なんで携帯じゃないの？」
『電話はお金がかかるからです！』
「神様なのに？」
思わずつっこんでしまった私は悪くない。
『それでは、さようなら！』
ぷつっ、と電話が切れる。
「さて、どれどれ……」
テーブルの上においてあった紙を読み始める。
紙にはこんなことが書いてあった。

“女性にしか反応しない”、世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「ＩＳ」（アイエス）の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。織斑一夏は、自身が受ける高校の入学試験会場と間違って、ＩＳ操縦者育成学校「ＩＳ学園」の試験会場に入室。そこにあったＩＳを、“男”でありながら起動させてしまい、ＩＳ学園に入学させられてしまう。

…だそうだ。
「…典型的なハーレムものかも」
呟いて見て、インデックス口調になっていることに気付いてあれっと思う。
そういや、リィンがそんな感じのこと言ってたな。
「ん？　って、あ！」
時計を見て、はっとする。
もうすぐ入学式の時間だ。
とりあえずＩＳ学園のことが書いてある資料を引っつかんで、慌てて家を出…かけて気がつく。

「寮に行くんだから生活するためのものがいるのかも！」
かもじゃなくて断定なのだが、今はどうでもいい。
再び高速移動して荷物をまとめ、『歩く教会』の中に放り込む。
あれ？　入った！？　これはドラ〇もんの四次元ポケットなのか！？
と心の中でつっこみつつも、ＩＳ学園まで走り出…そうとした瞬間、
神裂火織様様が来た。
「…乗っていきますか？」
車に乗った火織様が言う。
高速で首を縦に振る私。
「飛ばしますよ？」
「早く！」
「了解です！」
私と火織を乗せた車は凄いスピードでＩＳ学園へと向かった。

part1（後書き）

なぜにこんなに長くなる…？

Ｐａｒｔ２（前書き）

一夏のキャラがつかめん……。
というかこっちがメインみたいになってる……。

part2

俺――織斑一夏は困っている。
「そ、それじゃあSHR（ショートホームルーム）始めますよー」
黒板の前で若干引きつった笑顔ながらも微笑む女性、副担任こと山田真哉先生。
慎重は低めで、生徒とあまり変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。かけている眼鏡もっや大きめなのか、少しずれている。
ちなみになぜ俺がこの先生の名前を知っているかと言うと、ストーキングしていた……わけではなく、さっき自己紹介していたからである。
断っっっっじてストーキングしていたわけではないからな！
……はっ！？
俺は一体誰に向かって話していたんだ？　あれ？
……もう現実逃避はやめよう。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……」
先生のにこやかなあいさつにも全員無反応で、教室の中は変な緊張感に包まれている。
「じじじじゃあ、自己紹介をお願いしますえっと、出席番号順で」
うろたえている副担任がかわいそうになったので俺だけでも反応してあげたいのだが、そんな余裕はない。
なぜか。制限時間はないので考えてほしい。
……。
……。
……。
正解は、
俺以外のクラスメイトは全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい生活の幕開け。非常に良いことだ。
しかし、問題はとにかくクラスに男子が俺一人だけだと言うことだ。
（想像してはいたけど……実際はさらにキツいな……）
自意識過剰でも冗談でもなく、本当にクラスメイト全員からの視線（死線？）を感じる。
席も悪すぎる。なんで真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つじゃないか。
俺は窓側の席を見やる。
「……」
何かしらの救いを求めての視線だったのだが、薄情なことに六年ぶりに再会した幼なじみ、篠ノ之箒はふいっと顔を窓の外にそらした。
なんてやつだ。……もしかして俺、嫌われてる？
「……くん。織斑一夏くんっ」
「は、はいぃっ！？」
いきなり呼ばれて俺はびっくりして声が裏返ってしまった。
くすくすと笑い声が聞こえて、俺はますます居心地が悪くなる。
別に俺には女の子に対する苦手意識はない。が、限度というものがあるだろう。
いくらラーメン好きだって毎日ラーメンだったらさすがに飽きる。
……多分。
ともかく、クラスで男は俺だけ。……多分。
なぜ多分かというと二人もまだ来ていないやつがいるからだ。
一人はインなんたらとか言う奴。山田先生が、
「インデックスさーん？　まだきてませんね……」
と呟いていたからだ。
ここで居心地が悪くなっていた俺だが、このときばかりはクラスの女子と一緒に、
「目次って……」
と呟いてしまった。
もう一人は担任。インなんたらのほうは生徒だからまだいいと思う

が、担任が遅れるって……。
どこかの誰かさんを思い出すよ。
「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」
はっと自分の世界から戻ってくると、副担任の山田真耶先生が頭を下げていた。何度も何度も下げるので眼鏡がずり落ちそうになっている。
「いや、あの、そんなに謝らなくても……って言うか自己紹介しますから先生落ち着いてください」
「ほ、本当？　本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。絶対ですよ！」
がばっと顔をあげ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。あの、また凄い注目を浴びてるんですが。
しかしまあ、すると言った以上引く訳にはいかない。それになにより、最初に溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た。
覚悟を決めて、後ろを振り向く。
（うっ……）
今まで背中だけに感じていた視線（死線？）が一気に俺に向けられているのを感じる。
なにせさっき薄情にも俺を見捨てた箒でさえ俺を横目で見ている。
さすがにこんな風に注視されると……。別に俺には女の尾に対する苦手意識はない。が、限度と（以下略）。
「えー…えっと、織斑一夏です、よろしくお願いします」
頭を下げて、上げる。……ちょっと待て。なんだその『もっといろいろ喋ってよ』『まさかこれで終わりじゃないよね？』みたいな空気はなんだ。
首を冷や汗がつうっとつたう。

かちっ、と時計の分針が動いた。
それと同時に教室内の緊張がピークに達し、俺が緊張に堪え兼ねて口を開きかけたその時――――――、

「……え？」

今まで一言も喋らなかった箒がぽつんと言った。
みんなの注目が俺からそれる。
見えない重圧から解放された俺が大きく息をつく。
しかし、箒は窓の外をにらむように凝視したままだ。
そして、俺も箒が見ているものがなんなのか、見ようとしたその瞬間――――、

バリィィン！　…ドサっ！

窓が大きな白い固まりのようなものに叩き割られ、その白いものはごろごろと俺の机の前まで転がってきた。
みんながそれを見ようと立ち上がる。
しかしそれは、モノではなかった。
銀髪に翠の目、そして制服、ではなく修道服を来た少女。
それを見て、俺は一言。

「シスターさん？」

「痛った〜〜〜」
私――夜宵ことインデックスは頭をさすりながら立ち上がった。
「いくら早いからって、人をぶん投げるなんて、かおりはひどいんだよ……」
と愚痴をもらしながら自分の席（とおもわれる空席）に座った。
そして隣の男子（資料によると織斑一夏）が、
「シスターさん？」
……。
まぁ、合ってるね。

ｐａｒｔ２（後書き）

この話、じつは一回消えたんです…。
文章が消えるって、こんなに悲しいんだ…。ハハハ…。

part3

私――――夜宵ことインデックスが席に座ると、教室がざわめき始めた。
ちねみに私は織斑一夏にありがとうありがとうと合図を送られていた。
いったいどういう意味だろう？
「あのー……」
「どうしたんだよ？」
「自己紹介をしてるんですが、『あ』から始まって今『お』でね、インデックスさん来てなかったから飛ばしちゃったんだ。だ、だからね？　自己紹介、してくれるかな？」
と、副担任の山田真耶先生（黒板に書いてあった）に言われて立ち上がる。
ざわめいていた教室が一瞬でしんと静まり返る。
これはキツイ……。
織斑一夏もこの量の視線を持ってってくれれば感謝もするよね。
私は思わず数分前の出来事を思い出していた。

「…インデックス？」
「なあに、かおり？」
私――――夜宵ことインデックスは今火織の車の中にいる。
「『七天七刀』は持っていますね？」
――――『七天七刀』。
神裂火織の持つ２メートルあまりの巨大な日本刀。
私――インデックスが持つには違和感がありすぎる。

しかし、記憶を探ってみるとあるわあるわ。
神裂さんのスパルタで剣道を習っていたのだ。
「持ってるよ？」
「その刀でよければ存分に使ってくださいね」
「うん！　かおり、ありがと！」
「どういたしまして」
ちなみにＩＳ学園に行くというのは上層部が、
『ＩＳの性能、弱点などを調べ、敵対した際魔術は聞くのかなどを調べる』
と言うことになっていた。
…まぁ、実際はリィンがこう言うようにしむけて、私――インデックスに仕事をまわしたんだけどね！
そういえばリィンに電話をもらって、
『実はこの世界にいる神裂さん達は実は「もしもインデックスが【首輪】をつけられず、記憶も失わなかったら」と言うＩＦ？　の世界からつれてきたんだよー』
と爆弾発言をされた。
ＩＦの世界って本当にあるの！？　てかつれてこられるんなら上条さんにも会えたのに！
あのときはショックで真っ白になりました。
「インデックス？　付きましたよ？」
「あ、本当！？　かおり、ありがとね！」
車から降りて教室に向かおうとしたが、
「インデックス！　こちらのほうが早いですよ！」
と声をかけられて振り向いた瞬間――――――、

「え？」

中を舞っていた。

「えーっと、正式名称はＩｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ（禁書目録）で、呼び名は略称のインデックスでいいんだよ！　所属はイギリス清教　第零聖堂区「必要悪の教会（ネセサリウス）」で職業はシスターなんだよ！」

「……」

あ、あれ？　ミスった？　でもやっぱりシスターだから嘘はダメだよね。

「……はあ！？」

あれ？　どうしたの？

Part3（後書き）

インデックスの正式名称が長い…。

ｐａｒｔ４（前書き）

出席簿先生、初登場！
微妙に戦闘シーンありです。

part4

「……」
静かだ。
私、夜宵ことインデックスはそう思った。
沈黙が痛い。
一人、女子が手を挙げた。
「あの～、どうしたんですか？」
山田真哉先生がその女子に声をかけた。
「インデックスさん？　聞きたいことがあるの」
「なにかな？」
こてんと首を傾げる。
教室の端っこで、「あの子かわいい～」「萌え～！」とか叫んでいる人たちは無視しよう。うん、きっと突っ込んじゃいけないとこなんだ。
「とりあえず、イギリス聖教って何？　それから、インデックスって偽名なの？　それから何で制服着てないの？」
「まってまって、一個ずつ答えるから待って欲しいんだよ！」
慌てて手を出していったん質問をストップさせようとした時、
バンッッ！
と教室のドアが開けられた。
ふっ、と気配を感じてとっさに横に飛ぶ。
と、一瞬後、今まで私の頭があったところをスカっ、と出席簿が通っていった。
「ふむ、やるな」
声がして出席簿の主を見ると、
黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身。鍛えられてはいるが決して過肉厚ではないボディライン。くんだ腕に、オオカミを思わせる鋭い吊り目。

「げぇっ、関羽！？」
バァンっ！
「誰が三国志の英雄か、馬鹿たれ」
叩かれたのは織斑一夏だった。
「それから、貴様も」
ぶん、と振られた出席簿をよけるために通路を後ろに飛び退る。
え、よける時机にあたらなかったかだなんて？
あたるわけないじゃーん。
ごめんなさい、調子乗りました。
「貴様、制服は？」
「貴様じゃなくてインデックスなんだよ！」
「ちゃんと答えろ！　ついでにインデックスってどう考えても偽名だろうが！」
「偽名じゃないもん！　ちゃんと本名だもん！」
「だから制服はどうした！？」
「あんなに着心地の悪い変な服なんか着たくないもん！」
「お前の服の方が変だ！」
「この服は『歩く協会』と言って正式な修道服なの！」
なんだか口喧嘩になった。
ヒュッ、とまた出席簿が飛ぶ。
「ごめんなんだよ！」
先にポニーテールの女子に謝ってから、その机を持ち上げて、出席簿を受け止めた。
ワオ、受け止めた机がみしっていった。
まともに受けてたら頭蓋骨陥没してたかも。
それにしても、インデックスって意外に力持ちなんだねぇ。
とと、あ、また出席簿を振り上げてる。
ぽん、と机を放り出し、近くの机に飛び乗って、跳躍する。
ちょうど担任の真後ろに回って、
「覚悟〜！」

と言って頭に噛み付いた。
つもりだった。
「…およ？」
悲しいかな、身長の差というものがあり、私は担任に首をつかまれ、猫のような体制になっていたのだった。
ああ、神よなぜ私を見捨てたのですか（レマ・レマ・サバクタニ）
い～。

part5

「早く離すんだよ！」
…はい、状況確認。
？担任っぽい女に叩かれそうになる。
？かわして反撃。
？首を掴まれ、ぶら下げられた猫のような体制になる。
？冒頭の言葉。
…はい、以上、私、夜宵ことインデックスの状況確認でした～。
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」
「私を無視したまま会話しないで欲しいんだよ！」
じたじたと暴れるものの、全く手の力は緩まない。
「うるさい、静かにしろ」
バァン！
といい音が響くものの、さすがは『歩く教会』。
全く痛くない。
ビバ、『歩く教会』！
「い、いえっ。副担任ですからこれくらいはしないと…」
さっきの涙声はどこへ！？　と小声で突っ込んでいる織斑一夏は放っておいて、本題。
「首が絞まって苦しいんだよ！さっさと下ろすんだね！」
しゃーっと威嚇しながら担任の足を蹴る。
じたばたと暴れていると担任が離してくれた。
が、離すというより落とした。
「みぎゃっ！？」
ついつい猫のような悲鳴を上げてしまった。
したたかに打ち付けたお尻をさすりながらじとっとした目でにらみつけるが完全無視。

「諸君私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者にするのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。できないものにはできるまで指導してやる」
「指導じゃなくて調教じゃ……」
バァン！
さっき出席簿で叩かれた（痛くなかったけどね！）ことの私のささやかな反撃は出席簿アタックによってあっさりと返された。
「私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。讃良ってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」
なんという暴力発言。職務の乱用だ！
私が再びささやかな反撃をしようと口を開きかけた時、
「キャーーーーー！　千冬様、本物の千冬様よーーー！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に着たんです！　北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんてうれしいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」
信じられないことに、クラスの半数がきゃいきゃいと騒いでいる。ここにはまともな感性を持った人間はいないのか！？
「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」
これはポーズでなくまじめに言ってるな。ああ、女子のみんながかわいそう。
…なーんて思った私は馬鹿でした。

part6

「きゃあああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないようにしつけをして！」
なんだ、これは……？
私、前世は夜宵、今世はインデックスは混乱中です。
全く、このドMどもが！　このクラスにはマゾばっかりだ！
「で？　お前は何を固まっているのだ、バカたれが」
「いや、千冬姉。俺は――」
バァンっ！
あ、織斑一夏が叩かれた。
でも同情はしないもんね！　これからハーレム状況でぐふぐふ言うようなやつには同情なんかしてやらないもんね！
「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」
「ちふゆといちかは仲がいいんだねー」
「織斑先生と呼べっ！」
しゅっ！
「危ないんだよ、ちふゆ。出席簿の表紙は意外に固いんだよ？」
「すげー……」
ん、織斑一夏に尊敬の目で見られた。なんか悪くないね。
と、そんなこんなでにぎやかなここをおいておいて教室はざわめきはじめている。
「え……？　織斑君って、あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ、世界で唯一『ＩＳ』を使えるって言うのも、それが関係して……」
「ああっ、いいなぁっ。変わってほしいなぁっ」
最後の人、期待しすぎだろ。まあ、本人はぜひに変わってくれって

顔してる……。

Part6（後書き）

後から書きますんで途中保存。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4704y/

IS ＜インフィニット・ストラトス＞ ～禁書目録の転生者～

2011年11月25日17時50分発行